

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463411

研究課題名(和文) 子供を持つ乳がん患者への複合型サポートグループプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a combined support group program for breast cancer patients with children

研究代表者

橋爪 可織 (HASHIZUME, Kaori)

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・助教

研究者番号：20338578

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は子供を持つ乳がん患者に対する対面式のサポートグループとインターネットを利用したサポートグループを併用した複合型サポートグループプログラムを開発することを目的とする。このプログラムを開発するために、外来化学療法を受ける乳がん患者の子供への思いについて調査した。また、乳がんと診断された女性患者がインターネットからどのような情報を得ているのか、またインターネットからの情報利用に伴う利点と困難さについて明らかにした。これらの結果をもとに、複合型サポートグループプログラム実施のためのホームページ【子育て中の乳がん患者のためのコミュニティサイト～スマイリングマミー～】を開発した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to develop a combined support group program for children with breast cancer using a face-to-face support group and a support group using the Internet. In order to develop a combined support group program, we studied the concerns of breast cancer patients as a mother. We also clarified what information breast cancer patient has from the Internet and the advantages and difficulties associated with using the information from the Internet. Based on these results, we developed a homepage for implementing the combined support group program "Smiling Mommy", community site for breast cancer patients with children.

研究分野：がん看護学

キーワード：乳がん 母親 サポートグループ インターネット

1. 研究開始当初の背景

日本において乳がんは女性の部位別がん罹患率第1位の疾患であり、罹患率、死亡率ともに年々増加している。乳がんは比較的予後良好ながんといわれているが、発症は30歳代から急激に増加し、ピークは40~50歳代である。この時期は家庭や社会でさまざまな役割を担っており、子供の養育をしながら自分自身の病気と向き合い、治療を受けている患者も多い。子供を産み、育てることはそれだけでも多くの時間と労力を費やすことであるが、乳がん患者はさらに病気と向き合うことや治療という大きなストレスを受けながら生活している。がんという診断名を子供に伝えることを躊躇したり、自分の感情を抑制してしまう患者¹⁾²⁾や、母親役割が果たせず、子供に申し訳ないという思いを持つ患者も多い。

一方で、18歳以下の子供を持つ術後間もない初発乳がん患者を対象とした茂木ら³⁾の研究によると、患者は乳がんが治癒すると同時に、自分の役割を遂行し自己実現をしていくことや、以前と変わらない普通の生活をしていくという希望を持っていた。また、前田ら⁴⁾は、乳がんの発病は子供を持つ壮年期女性に母親としてのあり方を熟考させ、母親としての成長を促すとしている。このように、これまでの研究では子供を持つ乳がん患者は、思い悩みながらも、病気という体験を通して自分自身を成長させていることが明らかになっている。

1970年代から米国ではがん患者に対するグループ療法が報告され、日本においても1990年代から実施されるようになった。グループ療法の効果についての研究は数多くあり、乳がん患者を対象としたグループ療法により不安感や抑うつが軽減することが報告されている⁵⁾。インターネットを利用したサポートグループも開発され、その効果は対面式のサポートグループと同様に抑うつが低下するとしている⁶⁾⁷⁾。研究代表者はがん患者を対象としたサポートグループの運営に携わった経験があり、人に話すことや励ましを受けることで、自分一人ではないと感じることの重要性を感じた。

そこで、本研究では子供を持つ乳がん患者に対してのサポートグループプログラムを開発することとした。しかし、従来から日本で行なわれている、数回のセッションで構築された対面式のサポートグループは、時間的な拘束により、子育て中の母親にとっては負担が大きいと考えた。一方で、インターネットを利用したサポートグループは、顔の見えない相手とのやり取りになるため、他者とのつながりが希薄になることや、情報の信頼性が確保されないというデメリットもある。

複合型サポートグループプログラムは、対面式のサポートグループで参加者同士のつながりを深めることができ、また、インターネットによるサポートグループは参加者の

ライフスタイルに合わせた活用ができるため、それぞれのメリットを生かすことが可能であると考えた。また、サポートグループの参加者は子供を養育中の母親でもある乳がん患者であり、共通した体験や思いを持っていることが予想され、より効果的にグループダイナミクスが働く可能性があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は対面式のサポートグループとインターネットを利用したサポートグループを併用した複合型サポートグループプログラムを開発することを目的とする。研究期間における具体的目標は以下の3点である。

(1) 外来化学療法を受ける乳がん患者の子供への思い

外来で治療を継続しながら子供を養育している乳がん患者の療養生活における「子供への思い」について明らかにする。

(2) 乳がん患者のインターネットによる情報収集に関する研究

乳がんと診断された女性患者がインターネットからどのような情報を得ているのか、またインターネットからの情報利用に伴う利点と困難さについて明らかにする。

(3) 複合型サポートグループプログラムの開発

上記(1)(2)および文献検討により、子供を持つ乳がん患者を対象とした対面式のサポートグループとインターネットを利用したサポートグループを併用した複合型サポートグループプログラムを開発する。

3. 研究の方法

(1) 外来化学療法を受ける乳がん患者の子供への思い

対象者

A 大学病院乳腺内分泌外来に通院中で、告知から3か月以上経過し、0歳から18歳までの子供を養育している乳がん患者。また、研究協力の同意を得た者。

データ収集方法

インタビューガイドを用いて半構成的面接をそれぞれ1回行った。

インタビュー内容：子供に病気や治療についてどのように話したか、子供にどのような思いを抱いているか

分析方法

インタビューの内容を逐語録に起こし、その中から子供への思いを表現していると考えられる部分を抽出し、意味を損なわないようなコードとした。類似性のあるコードをサブカテゴリーとし、さらに抽象度を上げてカテゴリーとした。分析過程において、信頼性と妥当性を確保するために、カテゴリーが一致しているか研究者間で確認し、その後がん看護を専門とする看護師にスーパーバイズを受けた。

倫理的配慮

研究を実施するにあたり、所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。

(2) 乳がん患者のインターネットによる情報収集に関する研究

対象者

乳がんと診断・告知されており、A大学病院の外来に通院している女性患者で、インターネットで情報収集を行ったことがある者。また、研究協力の同意を得た者。

データ収集方法

インタビューガイドを用いて半構成的面接をそれぞれ1回行った。

インタビュー内容：インターネットによる情報収集の内容、インターネットからの情報利用に伴う利点と困難さ、生じた困難さに対する対処

分析方法

インタビューの内容を逐語録に起こし、利点と困難さに関するものを抽出してコード化した。内容が類似しているものをサブカテゴリ、カテゴリへと抽出度を上げ分類を行い、インターネットからの情報利用に伴う利点と困難さについて明らかにした。

倫理的配慮

研究を実施するにあたり、所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。

(3) 複合型サポートグループプログラムの開発

上記(1)(2)および文献検討より、子供を持つ母親を対象とした対面式のサポートグループとインターネットを利用したサポートグループを併用した複合型サポートグループプログラムを開発した。

4. 研究成果

(1) 外来化学療法を受ける乳がん患者の子供への思い

対象者6名であり、すべて40歳代(平均44.2歳)であった。また、対象者の子供は2~4名で、幼児から高校生であった。すべての対象者は乳がん術後であり、面接時は放射線療法、ホルモン療法、分子標的療法のいずれかを継続中であった。診断からの期間は7か月~4年であった。

収集した語りの内容を質的帰納的に分析した結果、【子供たちに心配させたくない】【病気扱いされたくない】【親の責任を果たしたい】【子供への詫び】【自分の経験を活かして欲しい】【子供に支えられている】の6つの子供への思いが抽出された。患者は、母親役割を遂行できていないと感じ、子供に対して詫びる気持ちを抱く一方で、子供の存在が精神的な支えとなっていた。

子供を養育している乳がん患者が生活を調整しながら治療を継続していくためには、子供の年代に応じた患者への支援、また子供

に対する支援も考慮する必要があると考える。

(2) 乳がん患者のインターネットによる情報収集に関する研究

30~50歳代の乳がん患者7名を対象に半構成的面接を実施した。婚姻状況は既婚6名、未婚1名、職業は主婦2名、事務職2名、医療職者1名、パート勤務2名であった。全員が手術を受け、その後化学療法、放射線療法、ホルモン療法のいずれかを行っていた。

インターネットによる情報収集内容は、病気や治療、副作用に関する内容だけでなく、子供を持つ乳がん患者は、子供への病気の伝え方や子供への遺伝についての情報収集も行っていた。また、多くの対象者が乳がん患者の体験談を参考にしていた。

インターネットからの情報利用に伴う利点は【心理的安寧につながる】【情報源】【気軽さ】の3カテゴリ、困難さは【必要な情報の不足】【知ることへの不安】【情報の多様性に対する混乱】の3カテゴリが抽出された。また、困難さへの対処として【適切な情報の選択】【情報に振り回されない】【相談する】【納得するまで調べる】の4カテゴリが明らかになった。

乳がん患者にとって同病者は、体験の共有やポジティブロールモデルとして、他のサポート源では果たせない役割を担っている⁸⁾とあるように、ほとんどの対象者は医療者の提供している情報より、同病者の生の声を知りたいという思いが強く、インターネットの体験談を参考に心理的安寧を得ていた。

情報利用においてインターネットは利点と困難さの両側面を持つことが明らかとなり、対象者は利点を生かしながら困難さにも対処していた。ヘルスリテラシーが高いことは情報利用をより有利にしており、患者に対するヘルスリテラシー向上への支援が求められる。

(3) 複合型サポートグループプログラムの開発

複合型サポートグループプログラムは、対面式サポートグループとインターネットを利用したサポートグループを併用したプログラムである。対面式サポートグループを行うことで参加者同士の“顔の見える関係”を構築することができ、参加者を限定することで、情報の信頼性を確保することができる。また、インターネットを用いたサポートグループは24時間いつでも自由に参加することができ、インターネット端末があればどこにいても参加することができる。個人情報の漏えいを防ぐために、対面式サポートグループではその場で話された個人情報について漏らすことのないように参加者に説明する。また、インターネットを利用したサポートグループのためにホームページを立ち上げるが、そのシステムの構築の際、ログイン機能を設

置し、本プログラムの参加者だけが閲覧や書き込みが可能となるようにした。

対面式サポートグループの内容

第1回目はプログラムのガイダンスと参加者の自己紹介、第2回目はプログラムのまとめ、修了式を行う。対面式サポートグループは研究代表者がファシリテーターとして進め、1回2時間程度とする。

インターネットを用いたサポートグループの内容(図1)

インターネットを用いたサポートグループの実施のため、ホームページを作成した。【名称：子育て中の乳がん患者のためのコミュニティサイト～スマイリングマミー～】

乳がんと子育てを両立するための情報提供(子供への病気の伝え方、親ががんである子供の体験、乳がん治療と妊娠、乳がんと遺伝、経済的なサポート、家族・同病者・医療者からのサポート)、乳がんと子育てに関する対処方法の強化、特に情緒的なサポートを目的とした医師、看護師(乳がん認定看護師、がん看護認定看護師)、ソーシャルワーカーへの相談窓口の設置、掲示板システムを利用した参加者同士の体験を共有したり、交流を図ることが可能な内容とする。

		内容
対面式サポートグループ	第1回目	・プログラムのガイダンス ・参加者の自己紹介
	第2回目	・サポートグループのまとめ ・修了式
インターネットを利用したサポートグループ		<p>・乳がんと子育てを両立するための情報提供 子供への病気の伝え方、親ががんである子供の体験、乳がん治療と妊娠、乳がんと遺伝、経済的なサポート、家族・同病者・医療者からのサポートなど</p> <p>・乳がん患者同士の体験を共有 掲示板の利用</p> <p>・情緒的サポート 医師、看護師(乳がん認定看護師、がん看護認定看護師)、ソーシャルワーカーへの相談</p>
※ログイン機能を設置 参加者だけが閲覧や書き込み可能		

図1 プログラムの内容

プログラムの実施方法

複合型サポートグループプログラムの実施方法は以下を予定している。倫理審査委員会での承認後、プログラム参加者のリクルートを行う。リクルートの対象は、乳がんと診断された20歳以上の成人で、0～18歳までの子供を養育している女性患者とし、研究協力の同意が得られた方とする。また、インターネットによるサポートグループを実施するため、パソコンなどによりインターネットの利用が可能な方とする。リクルート方法はホームページ上での募集、乳腺外科のある病院へのリーフレットやポスターの配布により、問い合わせや参加申込みのあった方に対して研究の同意を得る。

プログラムの実施は、患者のニーズに応じた情報提供と参加者の交流を図る内容とし、プログラムの開始時に第1回目の対面式サポ

ートグループを実施し、インターネットによるサポートプログラムを3ヶ月間実施後、第2回目の対面式サポートグループを行う。

実施した複合型サポートグループプログラムの効果を評価するために、第1回対面式サポートグループ実施前、第2回対面式サポートグループ実施後、及びプログラム終了から3か月後の3時点において、FACT-B、MAC、CES-Dを用いて調査する。また、研究者が作成した自記式質問紙を用いて対面式サポートグループ、インターネットによるサポートグループに関する利便性や改善点などについて検証する(図2)。

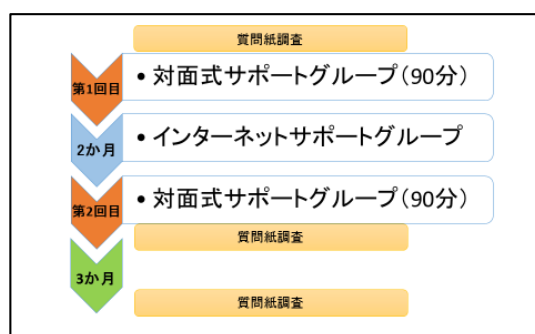


図2 プログラムの実施方法

<引用文献>

- 1) 越塚君江、神田清子、藤野文代：女性生殖器官がん患者の家族への思いとそれに対する看護援助、岡山大学医学部保健学科紀要、16：31-38、2005。
- 2) Jacqueline B, Leanda K, Olive B, Joanna L, Alison J, Alan S：Qualitative interview study of communication between parents and children about maternal breast cancer, BMJ, 321：19-26, 2000.
- 3) 茂木寿江、大山ちあき、藤野文代、神田清子：子供を持つ乳がん患者が抱く希望、Kitakanto Med J, 60：235-241、2010。
- 4) 前田真紀子、佐藤禮子：子供を持つ壮年期女性の乳癌発病後の役割意識の変化、岡大医短紀要、7：189-199、1996。
- 5) Montazeri A, Jarvandi S, Haghghat S, et al.：Anxiety and depression in breast cancer patients before and after participation in a cancer support group, Patient Education and Counseling, 45:195-198, 2001.
- 6) Winzelbelg A, Classen C, Alper G, et al.：Evaluation of an internet support group for women with primary breast cancer, Cancer, 97(5): 1164-1173, 2003.
- 7) Lieberman M, Golant M, Giese-Davis J, et al.：Electronic Support Group for breast carcinoma, Cancer, 97(4):920-925, 2003.

8) 前田優雅、国府浩子、藤井徹也：治療中の乳がん患者に及ぼす同病者からの影響と関連する要因～乳がん患者会会員を対象として～、がん看護 14(6)、2009.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

橋爪可織、西田望、安倍祥代、中尾由美子、月川弥生、楠葉洋子(他3名、1番目)：外来で治療を継続している乳がん患者の子供への思い、保健学研究 28、29-35、2016. 査読有

http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/36177/1/hokenn28_29.pdf

〔学会発表〕(計1件)

後藤ひかり、山本綾乃、橋爪可織、月川弥生、楠葉洋子：乳がん患者のインターネットによる情報収集内容及び情報利用に伴う利点と困難さ、第31回日本がん看護学会学術集会、高知県立大学永国寺キャンパス(高知県・高知市)、2017年2月5日

〔その他〕

ホームページ等

「子育て中の乳がん患者のためのコミュニティサイト～スマイリングマミー～」

<http://smiling-mammy.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋爪 可織 (HASHIZUME, Kaori)

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・助教

研究者番号：20338578

(2) 研究分担者

楠葉 洋子 (KUSUBA, Yoko)

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・教授

研究者番号：90315193